

VII. クテ打指操作法の基本組紐 3 種

(1) はじめに

クテ打は指や手に輪状の材料をかけて組むループ式の古い組紐技法です。今日、伝統工芸に位置づけられている組紐には、京くみひもや江戸組紐などがありますが、これらは江戸時代初期が起源と思われる自由端式の台組紐法です。すなわち材料が輪状になっておらず、丸台や高台などの台を使って組む方法で、時代劇・必〇シリーズや某アニメ映画に登場した組み方です。

伝統工芸の組紐もわが国が誇るべき文化ですが、出土品が弥生時代や古墳時代にさかのぼり¹⁾、東大寺正倉院などに伝世品が残るクテ打の意義は計り知れません。当館はこうしたクテ打の魅力や伝承活動の必要性に注目し、クテ打研究者の指導²⁾を仰いで、平成 24(2012)年度末からストラップや腕飾りを作るワークショップを開催しています。

しかし、一度体験しただけで作り方を長く覚えておくことは難しいうえに、一般向けのテキストが広く普及しているわけではありません³⁾。そこで、クテ打を体験された方が後に作り方を思い出す助けになることを願ってこの頁を制作しました。当館に断り無くコピーし再配布していただいて構いません。公式 Web サイトから配信する PDF データも利用してください。用語はわかりやすくするために本来の言葉から変更している場合があります。文調も柔らかくしました。

なお、実際に組んだことがない方が初見で組むことは難しいです。インターネットで配信されている動画でも同様です。作ってみたい方はまず当館のワークショップに参加してください。

(2) クテ打の材料と道具(写真 9)

①毛糸(写真 9 ①) 一般的な作品づくりや練習にも使える万能材料です。最初は並太を 2～3 色そろえてください。手芸用品店や 100 円ショップの廉価なもので充分ですし、自宅で余っている毛糸でも良いでしょう。新たに買う場合は銘柄をな

松本太郎・組紐ボランティア(市立市川考古博物館)

るべくそろえてください。同じ並太でも銘柄によって太さが異なり、組み目が不ぞろいになりがちだからです。色は 1 色は白を、ほかはあざやかな色をすすめます。写真のように同じ長さの輪状の糸を 3 本用意して重ね、短い輪の糸でひばり結びして組頭くみがしらを作ります(写真 10・11)。

②木綿糸(写真 9 ②) ストラップなどの作品づくりには上述くみがしらの組頭を結ぶ糸に木綿糸を使うと見映えが良くなります。組紐用毛糸の半分程度の太さがおすすめです。作品によっては組む糸も木綿製にすることがありますが、毛糸より細いために進みが遅く時間がかかりがちです。

③スチレンボードの板(写真 9 ③) 材料を巻いて一定の長さにそろえて切るための道具です。当館では不要になった 7mm 厚の展示パネルを切って使っています。商品名では貼はれパネ、のりパネなどと呼ばれています。幅は 7cm で、ストラップ用毛糸には長さ 25cm 弱が適しているほか、数



写真 9 クテ打体験用の材料と道具

①毛糸(並太) ②木綿糸 ③スチレンボードの板
④G クランプ ⑤小判札 ⑥はさみ

① 毛糸で長さ約 25cm の輪を 3 本作る

② 木綿糸で約 10cm の輪を作り、ひばり結び

③ この輪を G クランプにかける



写真 10 材料見本 (見やすくするため太さ 5mm の紐を使用)



写真 11 ひばり結び

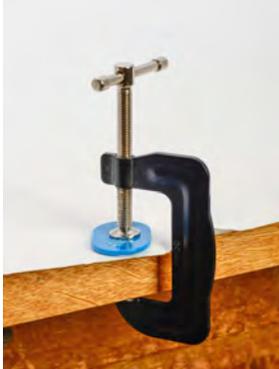


写真 12 G クランプの固定

種類を使い分けています。家庭では下敷きや幅広の定規、厚手の段ボールなどで代用してください。

④ G クランプ (写真 9 ④) 本来は固定用の工具ですが、ネジを上にも木の天板に取り付けて、組頭の糸をかける台として使います。ネジをしっかり回すと天板に傷がつくため、当館では小判板 (写真 9 ⑤) を間に挟んでいます (写真 12)。小判札は飲食店などで順番待ちの整理券や金券として良く使われています。折りたたんだ紙でも代用できます。どちらも 100 円ショップなどで入手できます。

⑥ はさみ (写真 9 ⑥) はさみは文具メーカー製など良く切れる製品をおすすめします。



写真 13 初期配置 (3 本・両手)



写真 14 初期配置 (操作指側・拡大)

(3) 材料の指へのかけ方

クテ打指操作法では組み始める前に指へのかけ方を工夫すると格段に組みやすくなります。3 本、5 本、7 本など、奇数本数の材料で組むことが基本です⁴⁾。今回は 3 本組を例に説明します。

まず手のひらを上にして軽く開き、2 本を片手の小指と薬指の第一関節付近にかけます。軽く曲げて糸を引っ張り、摩擦を効かせるなど工夫して留めてください。指の間には隙間を作りましょう (写真 13・15)。

指のつけ根に深くかけたり手をにぎる姿勢が初心者に良く見られます。しかし、糸を外すときに外しにくくなり、輪と輪が重なってその間に指を差し込みにくいなど、百害あって一利無しです。繰り返しになりますが、指を軽く曲げて軽く開く、第一関節付近にかけることを守ってください。

残りの 1 本は反対の手の薬指にかけて小指は空けておきます。この空いた小指を操作指と呼び、

毛糸を組む時に使います(写真14)。以上、3本組では両手の薬指・小指の合計4本を使います。

なお、仕上がりの意匠にこだわりが無ければ、操作指は左右のどちらから始めても構いません。

(4) 角組かくぐみの組み方

角組かくぐみはクテ打で最も基本となる組み方で、断面が不整形の1本にまとまる組紐です。材料を3本輪で組むと6本分の毛糸が斜めに交差してできています。組み方は左右対称の同じ動きを繰り返しますので、それぞれ往路、復路と名づけて往復を説明します。

工程①：往路 まず、写真13・14のように左小指を操作指として往路を説明します。両方の手のひらを軽く立てて(45度くらい)、反対の右小指の輪に操作指を差し込みます(写真16)。

次に左手のひらを閉じて(下向きに回転させて)、右薬指にかかる輪の上糸を、上から操作指をかけて抜き取ります(写真17)。右小指の輪は操作指を抜く時も引っかかないように気をつけましょう。このような動作を「閉い」、「閉移動い」、「閉で取るい」などと呼んでいます。

輪の数が左右で入れ替わったら、復路に備えて輪を差し替えます。再び両手のひらを上にして、右小指に残る輪に、右薬指を差し込み(写真18)、右小指をぬいて(写真19)、材料の輪が右薬指に移動します。右小指が空いて復路の操作指となります。

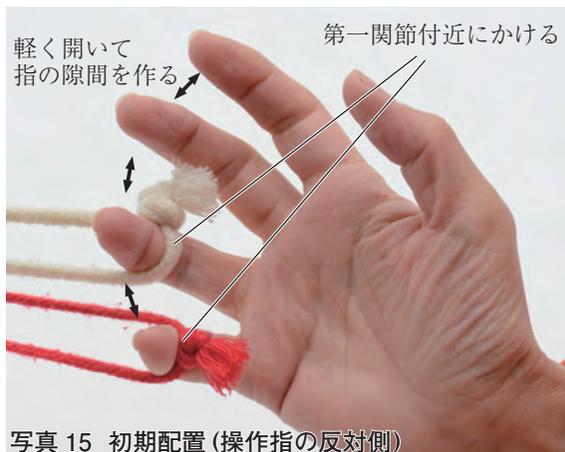
工程②：復路 既に述べたように、往路と同じ動きを左右対称に実施してください。詳細は省略します。

工程③：締める(打つ) 往復を終えて輪が元の位置(写真20)に戻ったら、組頭の又の角度90度から120度くらいを目安に両手を開いて、紐を締めてください。後世の技術かもしれませんが、助手や道具を使ってヘラを又に打ち込む方法もあります。そのため、締める動作を「打つ」とも呼び、組紐用語の語源となっています。

この締める動作は工程①②の往復してから1回入れてください。往路の後に締める、復路の後も締めると、締める力加減の差が反映されやすくムラが目立ちがちです。左右両方組んだ往復後、

2回に1回締める程度が整いやすいです。

締め加減をもう少し具体的に説明します。組頭しは材料を束ねてあるため、表面が毛羽立った毛糸が引っかかり、束の中で遠い糸どうしが絡むなどして組目くみめがゆるくなりがちです。そこで、最初の数回はしっかりと締める必要があります。



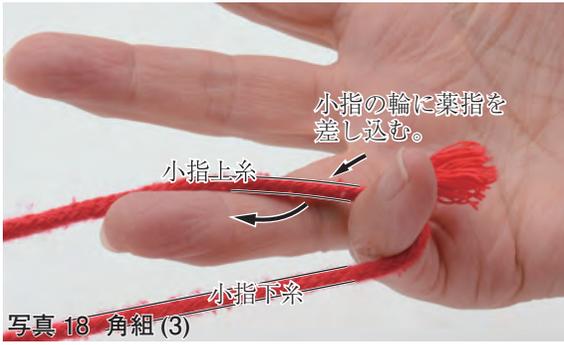


写真 18 角組 (3)



写真 19 角組 (4)

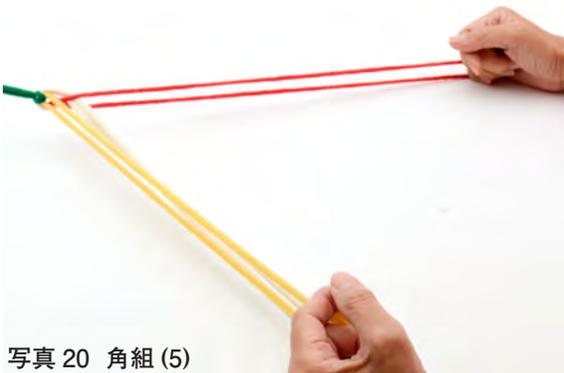


写真 20 角組 (5)



写真 21 角組 (6)



写真 22 結び イ)

進み始めたらほぼ一定の加減で良いですが、作業後半に材料が短くなると力を伝えやすく、組み目が次第に詰まりがちになります。そこで、締め加減をわずかに弱めていくと組目が整い美しく仕上げることができます。最初は難しいですが、ある程度練習を重ねると、慣れてその加減ができるようになります。

工程④：繰り返す 工程①から工程③を繰り返してください。慣れるまではゆっくりと丁寧に行い、①から③のそれぞれの間に、手のひらを上に向ける初期配置の姿勢(写真13)を入れてください。落ちついて次の操作指や通す輪、取る糸を確認してから次の動作に移りましょう。

慣れてきたら速度を少しずつ速めて、頭の中でリズム良く次の動きを念じながら進めてください。やがて、念じることがなくても自然に手が動くようになります。

組んでいると楽しくなって材料の輪の結び目ギリギリまで組みたくなりますが、始末する際の房の長さや結びやすさを考えて7cm位は組まずに残しましょう。

工程⑤：始末ほか 結び方には大きく分けて2種類あります。ア)3つの輪をまとめて固結びする方法、ないし、イ)一つの輪を他と離して周りに回し孔に通す方法です(写真22)。しっかり結んで好みの長さで房を残し、輪の先端を切り落としてできあがりです。

なお、5本組の場合は左右とも中指まで、7本組みなら人差し指まで材料の輪をかけてください。5本組の場合は小指の輪だけでなく薬指の輪もくぐって最奥の中指上糸を取ります。同様に7本組みなら中指の輪までくぐって人差し指上糸を取ってください。

(5) 蛇腹組、重打の組み方

① **蛇腹組** 2本を同時に組み、おのおの3本の毛糸が斜めに交差してできています(写真25)。

糸の取り方は角組と異なります。操作指を小指の輪に差し込んだら、手のひらを上に開いたまま、続けて薬指の輪に操作指を入れます(写真23)。そして、薬指上糸を下からすくい取るようにかけて抜き取ります(写真24)。このような動

作を「開^{かい}」、「開移動」、「開で取る」などと呼んでいます。小指の輪から操作指を抜く時は角組以上に小指の輪を引っ掛けやすいので、操作指の角度を変えるなど工夫しましょう。糸の取り方以外は角組と同じ組み方です。

なお、角組はまちがえても組目にアラが見えるだけで紐としては完成するのに対し、蛇腹組は2本が交差し接合するので注意が必要です。

②重打^{しげうち} 幅広の平らな組紐です。写真や詳しい解説は省略しますが、組み方は角組と蛇腹組の混合です。すなわち、往路、復路で、閉で取る、開で取る、を交互に繰り返すのです。

クテ打はクランプから材料を引っ張りながら作ります。特に重打の組紐は折りたたまれた状態で形成されるため、組み進んでいる間は細く見えます。組み上がったあとに開き、揉んで緊張をほぐすと、平らな仕上がりを実感できます。

(6) おわりに

角組を中心にクテ打指操作法の基本3種を紹介しました。この組み分けの違いをまとめると以下のとおりです。

角組は往復とも上糸を閉で取り、上下の糸が交差して3本輪の実質6本分が筒状の1本にまとまります。蛇腹組は往復とも開で取るため、3本輪の上糸・下糸が交差しないで、実質3本ずつの糸が別個に生まれ2本の組紐になります(写真25)。重打は角組で筒状に仕上がるはずの片方が開放され平らになります。

最後にクテ打に対する素朴な疑問を整理しましょう。まず、クテ打の材料はなぜ3本、5本、7本などの奇数本数を基本とするのか、多くの方が疑問に思われるでしょう。想像になりますが、例えば4本輪で小指を操作指として組むなら、初期配置の材料は両手の中指と薬指にかけることとなります。操作指とは反対側の小指も余らせて、組む途中で次の工程が往路か復路か迷い易くなる短所があります。同じ指の数を使うなら、材料の輪を増やして奇数本数にする方が、太くなる上に迷いが減り模様の正確性が上がります。操作指は見た目とともに指の感触でも確認できるので、慣れると無意識でも組み続けることができます。



写真 23 蛇腹組 (1)



写真 24 蛇腹組 (2)



写真 25 蛇腹組 (3)

なぜ小指を操作指とするのかも疑問です。輪の中を通して材料の糸を指でかけるなら、親指を除く手のひらのもう一つの端の、人差し指も選択肢です。人差し指は小指より細かい動きが得意ですし、世界のループ式組紐にはヨーロッパを中心に人差し指を操作指とする方法も実在します(木下2009)。

その一方で、小指を操作指とするクテ打にも有利な要素があります。手のひらを上にする姿勢が基本ですから指にかけた材料を落としにくくなります。反対の手に接するように位置する小指を操作指にすることで、失敗を防ぎ無駄な動きを減ら

すことができます。小指は他の3本より短いので、材料を保持するならば他の3本の方が有利です。物づくりに長けた手先の器用な人なら、糸を取る動作に差し支えはないでしょう。このような総合的な評価が、小指を操作指とするクテ打指操作法の完成に至った理由ではないでしょうか。

基本組紐3種を紹介した今回の説明は以上です。組んだ経験のある読者の皆様に理解していただけよう努力しましたが、動きを伴う技術は言葉だけでは理解しづらいものです。繰り返しますが、組み方に迷われた時はぜひ当館のワークショップに参加していただきたく、ご来館をお待ちしています。

謝辞

この文章は松本の草案を組紐ボランティアの皆さんとともに推敲したうえで、川邊千佳代さん、小村眞理さんの助言をいただいて再訂しました。この場をお借りして感謝申し上げます。

註

1) 兵庫県南あわじ市で採集された弥生時代前期末から中期前半(紀元前4世紀から紀元前2世紀ごろ)の松帆4号銅鐸は、舌(打ち鳴らすための分銅)を本体内部に組紐でぶら下げていました(定松ほか2021)。弥生時代以降に国内でも生産したと言われる青銅鏡は、背面のつまみに紐を通すための孔があり、組紐も製作していたと考えられます。古墳時代の出土品では前期(4世紀)の福島県会津大塚山古墳の鉤やりがんなに組紐で柄を固定した例が古く(山田・小村・木沢2018)、後期(6世紀)では有名な奈良県藤ノ木古墳の出土品や、群馬県金井東裏遺跡の人骨着裝掛甲にも組紐が伴っていました(尾形2006、大木ほか2017)。これらはクテ打指操作法で製作されたと考えられますが、詳しい組み方は今後明らかにされていくのではないのでしょうか。小村眞理さんから事例をご教示いただきました。

2) 最初は松本が組紐・組物学会で故木下雅子さんに教えを受け、後にボランティア指導員とともにクテ打組紐技法研究会の川邊千佳代さん、小村眞理さんに講習会で学びました。

3) 組紐・組物学会がワークショップのテキストとして有償頒布したり(木下2011ほか)、クテ打組紐技法研究会が指導者の養成を目的としたテキスト(木下2010ほか)や動画DVDを制作しています。後者は国会図書館や大学図書館で閲覧できますが、一般の書店で購入することは困難です。

4) 故木下雅子さんの研究によれば、正倉院宝物の角組は2/3が奇数本数で組まれています(木下2009)。

参考文献

- 井上美知子・小村眞理 2005「出土資料に見られる組紐」『執轡如組』平成17年度秋季特別展、元興寺・元興寺文化財研究所、7-10頁
- 尾形充彦 2006「藤ノ木古墳の組紐について」『藤ノ木古墳から見た古代繊維製品の研究』榎原考古学研究所研究成果、第7冊、奈良県立榎原考古学研究所、109-124頁
- 小村眞理 1997「復元技法からみた組紐」『創立30周年記念誌』元興寺文化財研究所、54-62頁
- 定松佳重ほか 2021『松帆銅鐸調査報告書』Ⅱ、調査研究編、南あわじ市文化財調査報告書第20集、南あわじ市教育委員会
- 大木紳一郎ほか 2017『金井東裏遺跡甲着裝人骨等詳細調査報告書』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 木下雅子 2009「正倉院所蔵の組紐の組成技法について 附 クテ打組紐技法による古代角組の組成実技再現の試み」『正倉院紀要』第31号、宮内庁正倉院事務所、1-36頁
- 木下雅子 2010『クテ打組紐技法入門』クテ打組紐技法研究会
- 木下雅子 2011『クテ打組紐技法入門編 3基本組紐の組み方 テキスト・サンプル帳』改訂版
- 山田卓司・小村眞理・木沢直子 2018「会津大塚山古墳出土品の自然科学的分析」『会津大塚山古墳出土品保存修理報告書』会津若松市文化財調査報告書第156号、会津若松市教育委員会、107-138頁